

# お浄土のしおり 善導寺寺報 季刊四号

冬号  
平成二十四年  
十二月四日

わ我れ成 佛せんに 十方の衆生、我  
が名 號を稱うることを 下し 聲に至るま  
で、若し生まれずば、正 覺を取らじ。  
彼の佛 今、現に在し、成 佛した  
まえり。當に知るべし、本 誓の重 願、虚  
しからず。衆 生、稱 念すれば必ず往生  
することを得。 善導大師の言葉

善導大師という方は、法然上人が師と仰が  
れた中国「唐」の時代のお坊様で、「観 經 疏」  
という書物を著してそれまでの 浄土往生に  
関する疑問や誤解をすべて匡し、念 仏 三 昧  
という体験に熟達された、「阿彌陀仏の化身」  
と仰がれている人です。



阿彌陀三尊来迎図

今回は、法然上人のお手紙の一部をお読みします。「大胡の太郎實秀」という人は、現在の群馬県大胡の豪族で、その妻室にあてたお手紙の一節です。

大胡の太郎實秀が妻室のもとへつ  
かはす御返事（法然上人のお手紙）よ  
り

往生極樂のためにはたとえいかな  
る行なりというとも、念佛にすぎた  
ることは候はざるなり。

そのゆへは、念佛はこれ彌陀の本願  
の行なるかゆへなり。

（極樂世界に往生するためには、たとえ  
いかなる行法をおこなったとしても、念  
仏の行法に過ぎることはありません。）

本願と申すは、阿彌陀佛が未だ佛  
に成り玉わさりし昔、法藏比丘と申  
し、古へいにしえ、佛の國土をきよ  
め、衆生を成就せしめむかために、  
世自在王如來と申し、佛のみ前にし  
て、四十八の大願を起こし玉ひしそ  
の中に、一切衆生を往生せしめんが  
ために、一の願を起こし玉いける、  
これを念佛往生の大願とは申し候な  
り。

（本願」といいますのは、阿彌陀仏  
がまだ仏陀にならない菩薩様の時代、

法藏」という名前の出家修行者で  
あられた遠い過去の時、将来 仏陀と  
なる時の世界を浄らかにし、生け  
る者」をそこに迎入れ、自然に「悟  
り」に向かう身の上、菩薩」にな  
るようにするために、世自在王如  
來」といわれる仏陀の御前で、四十  
八種の 夙なる願い・目標」を起  
こし給い、その 四十八種の大願」  
の中に、すべての衆生を漏らすこと  
なくその世界に生まれさせようとお  
ぼしめして、特別に一つの願いを起  
こされました。これを 念仏往生の

大願」というのです。）

すなわち 無量壽經上卷」に云く、  
設し我れ佛を得たらんに、

十方の衆生、至心に信樂して我が國  
に生れんと欲して。乃至十念せんに  
若し生れずば正覺を取らじ。」

（すなわち 無量壽經」というお經  
の上卷にこのように説かれています。

もしもわたくしが悟りを開いて仏  
陀となつたあかつきには、あらゆる  
所の 衆生「生ける者」が、まごこ  
ろから、信じ樂つて、我が國に生ま

れたいとおもつて、少なくとも十遍、念じたならば、生まれることができるような仏陀になりましょう。もし、それが叶わないうちは、私は悟りを開いて仏陀に成りません。」

又善導和尚この願を釋して云く、  
若し我れ成佛せんに、十方の衆生、我が名號を稱うることに十聲に至るまで、若し生まれずば、正覺を取らじ。

彼の佛、今、現に在しまして成佛したまえり。當に知るべし、本誓の重願、虚しからず。衆生、稱念すれば必ず往生することを得。」

(又、善導和尚という尊い方が、この經文を解説していわれるには、

もしわたしが成仏するときに、すべての衆生が、我が名前を稱えることと少なくとも十聲に至るまでの生ける者が、もし私の世界に生まれないうらば、この上もない悟りを取りません。

彼の仏さまは、今、現に在して仏陀と成つておられます。まさに知るべきです。むかし誓かわれた重い願いは、真実なのです。もろもろの生ける者が阿弥陀仏の名を稱え念すれば、必ず往生することを得るのです。)

念佛は佛の法身を觀するにもあらす、佛の相好を觀するにもあらす。たゞ心をひとつにして、もはら彌陀の名號を稱するを、これを念佛」とは申すなり。かるかゆへに稱名」とはなづけて候なり。

(念仏は仏の悟りの内容のそのものを觀察することでもなく、御仏のお体

の姿を觀ようとするものでもありません。

ただ、心を一つにして、もつばら阿弥陀様の名號を稱えるのを、これを

念仏しよほうというのです。そうだからこそ、稱名しょうめいとなすけられているのです。)

念佛の他の一切の行は、これ彌陀の本願にあらず。かるかゆへに、たとひ、妙なる行なりといふとも、念佛にはおよび候まじきなり。

(念仏のほかのすべての行は、阿弥陀様の本願に誓われた行ではありません。そうでありますから、たとえ、どのように妙なる行であるといつても、極樂に生まれさせて頂くには、念仏には遠く及ばないのです。)

おほかたそのくに、むまれむと思はむものは、その佛の誓願にしたがうべきものなり。しかればすなわち彌陀の淨土に生まれむことは、かならず本願にあり。餘行はこれたくらふべからず。かるかゆへに往生極樂のためには、念佛の行に過ぎたることはさらに候はず。

(おおかた、その佛国土に生まれようと思う人は、そののみ佛の、こういう国土にしますという誓願に順うべきものです。ですから、阿弥陀様の淨土に生まれるということには、必ず本願の道理が働いているのです。その他の行法は、比べものにもなりません。この故に、往生極樂のためには、念仏の行に過ぎることは全くないのです。)

往生のみちにあらざる餘行またおのゝかたどるかたもあり。しかるに衆生の生死を離れるみちは、佛の御おしへやうやうに候といへとも、このころの人の三界にいて生死をはなるみちは、たゞ往生極樂ばかりなり。この宗の大きなるころなり。(往生の道ではない念仏以外の行は、又それぞれの人志すところによつて異なる道理もあります。そうではあるけれども、衆生の生死の苦しみ迷いを離れる道は、み佛の教えはいろいろありますが、この頃の人の能力からいえば、迷いの三界にいて生死を離れる道は、ただ、極樂に往生するという道だけです。これが、この宗の大事な広々としたころなのです。)

## 仏教の話

前回までのお話の補足の一つです

1、生きている者としての為すべき事、倫理道德、が、完璧に為し終わると、解脱・涅槃に至ります。このことは、お釈迦様がお示しになったことです。

ここで、こういう疑問が生まれてくると思います。

お釈迦様は、もとインドの小国の王子でした。何故人間は苦しみを抱くのか、自ら悩み苦しみを無くし、他の人をも悩み苦しみから解放される普遍的な方法を見いだそうという最高の仕事を成し遂げるために、将来一国の王様となる保証された地位を捨てて、出家されました。

出家なさる前は、インドの小国の王子様でした。父王は、スットーダナ王(淨飯王・じようほんおう)、お母様はお生まれになつてからまもなくお亡くなりになつたので、青年期までの母親は、乳母のマハー・パージャパティ・ゴータミーという王妃が乳母(育ての親)でした。

その田家いんげんの様子のことを、市販の多くの仏教入門書では、このように表現しています。

田家される時、愛馬に乗りおつきの家来一人を連れてある夜にひつそりと城を出て、可成り遠く離れてから、髪を剃つて、出家者にふさわしい服に着替えて、従者に渡し、馬と一緒に城にもどらせた、という記述です。

しかし、このことを何の予告もなしに、城門を出て出家した、と解釈すると、少し事実に反していると思ひます。

これだと、支離滅裂になつてしまいます。つまり、仮に、それが突然の事でしたら、夜が明けたら、お城の中の父王をはじめとする人々は、王子がいなくなったと、安否心配の大混乱だつたのではないか、ということになつてしまいます。

仏陀釈尊が、倫理道德の道が、苦しみから解き放たれるための道とお説きになつたのなら、どうしてお釈迦様は親族や家来が大変心配するような行為をしたのでしょうか?という疑問が出てきて、これによつて、良くわからない仏教觀の一片が作られてしまうと思ひます。

なるほど ある夜に城を出て、その後、髪をおろして法服を着た」というのは、子供向けの絵本にもかかれています。(私が子供の頃に見た釈尊伝の絵本はそうでした。)ここを少し考えてみたいのです。

お釈迦様が「出家」なさった時は、父母やお后は、王子の出家の意志とその目的を予感して知っていた、と受け取るべきです。そして菩薩である王子は、堂々と城の門をお出になったのです。お出になった時は夜半だったという記述があり、髪を毛を剃り、袈裟を着けたのは、城を出てから三つの国・地域を過ぎてからという記述もあります。城門を出るのが突然の事だったと受け取るのは、間違った解釈である様なのです。

つまり、お経などによる伝承、記録には、お釈迦様のご出家は、まさにその時同時に、関係の家族・王族の人たちの理解を誘い、納得せしめたというニュアンスがあるのです。

お釈迦様は、いわば社会的な身辺整理が青年のころからずつとあつて、城門を出ると同時に、完全に成し遂げられた様なのです。言い換えれば完全に成すべき事々(道徳)を守つて、出家して生命の真理を悟るという大事業をなさつたと言えると思います。

南伝仏教のお坊様のお話によると、お釈迦様は、青年期には、機会あるたびに父母にご自分の希望する仕事・道をそれとはなしに感じさせて、納得させようとしていたようなのです。これが正しい伝承の様です。

先ず父王は、釈尊がお生まれになつた時に、国に止まれば、転輪聖王(世界を正しい道理にもとずいて統治する偉大な王様)になるでしょう、王子の身分を捨てて出家すれば、人々が永らく待つていた仏陀になられるでしょう」という古い師の言葉を聞いていました。この時から、王位を継いで欲しいという希望は持ちながらも、仏陀になるべく出家するかも知れない」という気持ちをかすかにでも抱かれていたはずでした。

そして、菩薩である王子のご性格は、完璧という程、道徳的で誰にも好かれるご性格だったそうです。学問、武道の熟達も完璧、父王は、この息子のすることは、全く非のうちどころがない。この子のすることはすべて正しく、何であれ間違ひなく成し遂げる」とまで、思われていた様なのです。

又、青年期になつて、物事を楽しむ事から距離をおいて、真剣に物事をお考えになるご様子が見られたので、「万一にでも、出家してしまうかも知れない」と、王様なりに気をめぐらしてもおられたようです。

ヤシヨードラー王女を迎える時は、父親の王様が、武芸の秀でた人に娘を嫁がせると決めていて、武芸をあまり好まなかつた王子時代の釈尊に対して疑問を持つていました。そこで、ヤシヨードラー王女の父王は「おきさき取り大会」を開いたのですが、そこで初めて実力のすべてを見せて、周囲の国々の人々の耳目を驚かせたそうです。周囲が驚愕するほどの本

当の実力だったそうですが、経文ではその中でも慈悲深く智慧のある、たくみな道徳が守られていた事が伺えます。

菩薩である王子の出家が近づいたとき二十九歳の時に出家したと伝えられています、父王や乳母であるお后、ヤシヨードラー夫人は、その前兆を示す「夢」を見たそうです。菩薩王子ご自身も夢を見たそうです。

インド古代語のお経のもつとも古い方の発音の部分に、お釈迦様がお弟子の方方に親しくご自身の城を出たときの昔を振り返つた言葉として、こう記録されています。お釈迦様ご自身が語つたとされている文章です。

パーリー仏典の和訳である「南伝大蔵経」には、このようになっています。南伝大蔵経 第九卷中部經典 294 頁 第二十六 聖求経

比丘達、かくのごとき予は後に、年若き青年にして、漆黒の髪を有し、幸福と血氣とに満ち、人生の春に於いて、父母ねがわず、涕涙慟哭するうちに、鬚髮を剃除し、袈裟衣を着し、在家より出家行者となりぬ。」

漢訳のお経では、この文章などにあたると思います。

中阿含経 大正蔵01巻、776 頁 段 29 行

我れ年少童子清淨青髮より年を盛んにして時に年は二十九なり。爾の時、極めて多樂にして莊飾に戯

むれて遊行せり。我れ爾の時に於いて、父母は啼哭し、諸親は樂しまざるを、我れ鬚髮を剃除して袈裟衣を着けり。信を至して家を捨て無家にして道を學す。：」

どうでしょうか? どうも、そつと誰にも気づかれないようにお城を出た、とは読みづらいです。父母が別離の悲しみをこらえてないでいた、という事は出家の前に、父母はそのことを知つていた、と、読み取つた方が、自然な感じの文章です。菩薩である王子が、これから成就しようとしていることの意味が、わかっているからこそ、別離の情に負けないように啼きながら受け入れようとした、とも受け取れます。うすうす思つていたけれども、ここではつきりと引導を受けて、泣くだけないたあとは、かえつて気持ちが落ち着いた、という感じだと思えるのです。(私の勝手な主観ですが。)

王子がこれからしようとするのが何なのか、全くわからず、ただ城門を出ることだと受け取つていたら、やはり「どうしてそんなことを」と思つたり、とどめようとするのではないのでしょうか?

その上、やはり父母に告げずに夜間にそつと城門を出たなら、次の日には、父王は家来に命じて捜索して連れ戻そうと思うのではないのでしょうか。

しかし、連れ戻すために捜索したという記述はありませんし、むしろ父王は、五人の家来を出家させて、お



釈迦様と共に修行をさせ、様子、消息を把握させるという命令にとどめています。

出家以前から、色々と菩薩王子の求めている事を聞いていなければ(少なくとも、うすうすでも知っていなければ)、このようにはならないはずだ、と思います。

以上の考えは、南伝仏教の出家のお坊様のご説法を基礎にして考えたものです。そのご説法の主旨は、「田家」のお仕事は、「悟り・不死」を求めることであり、生命にとって最も意義ある偉大な仕事であり、このことを釈迦族の周囲の人々は菩薩王子の出家以前から知っていました、という事が主旨だったと受け止めさせて頂いております。

パーリー語の仏典のご紹介の部分は、私自身が南伝のご説法を聞いた後に、該当する部分を見たいと思っていた時、中央学術研究所の「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」というタイトルのホームページの中の「資料集」を参考にして、日本語訳の「南伝大蔵経」の中からご紹介しました。漢訳の方も同様です。

前述のように、お就きの家来を従えて駿馬に乗って城門を出て、三つの国を過ぎたかなり遠くのところで髪の毛をお剃りになり、法服をお着けになって、装飾と髪の毛を家来に持たせて城に帰らせた、という記述も別のお経文にありますので、「田家する」と言うことを初めて父王や周囲の身近な方方が知ったのが城門を出る前なのか後なのかは、はっきり

とは分からないのですが、お釈迦様が自ら語られた言葉からは、(事実がどのようなであれ)、周囲の人たちには、少なくとも結果的には不安や心配を残さないことであつたと受け取れます。周囲の人々は、ご出家の事実を知ったその時には「やはりそうか」と揺れ動いたかも知れませんが、その心は、すぐに落ち着いて「やはりそうだったのだ、あの方は偉大な仕事を成し遂げるために出家したのだ」と納得したのではないのでしょうか。私には、父母の前で剃髪をして法服を着けて、出家のご意志を伝えて城門を出られたとも受け取られますが、いずれにしても、菩薩王子のご出家は、周囲の人々も中途半端な気持ちを引きずるはめにもならず、倫理的だったと思うのです。

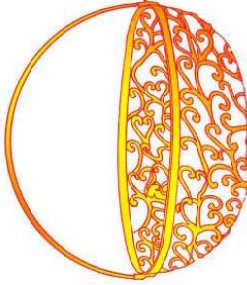
#### 参考資料

「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」ホームページ  
(<http://www.sakya-muni.jp/>)

#### 参考図書

『天正新修大蔵経』第一巻阿含部一  
『南伝大蔵経』第九巻中部経典一

華籠  
け 華籠～華を盛る籠



## 平成25年 善導寺 行事・予定

来年 一年間の当寺での行事・催事のご案内です。ご都合がつかずならば、気軽にお越し下さい。

### ○正月元旦 修正会

毎年1月1日午前0時に行います。天下泰平・玉体安穩・万民豊楽・家庭円満・子孫繁栄等を祈願致し、過ぎ行く年を反省と感謝で送り、希望に輝く新年を善願成就の願いをもつてお迎えする法要です。

初詣のお参りは、元旦午前七時より。

### ○正月第三土曜日淨焚式(おたきあげ)

古くなった仏具・おれ・お守りなどを伝承されている儀軌に則つておたきあげします。

### 毎月第一土曜日午後二時～三時

浄土宗のおとめ作法教室 2月より

皆様の「家庭には お仏壇」があると思います。毎朝のおとめ」のしかたがま

### 毎月第三日曜日午後二時～三時半

歌謡の集い、2月より

念仏往生」の教えのおもむきが、歌を通して自然に覚えられ、念仏往生」の助けとなる業になります。

### 毎月第四土曜日午後二時～三時半

お念仏修養会、2月より

正式には 別時念仏会(くつしねんぶつ

え」と云います。日時をあらかじめ決めて、気持ちを新たにしてお念仏を致します。

### ○三月善分の日を中心とした 週間 春期彼岸会

### ○四月八日 蓮仏会(はなまつり)

お釈迦様の誕生をお祝いします。お子様づれでどうぞ。

### ○八月十日 大施餓鬼会

### ○九月秋分の日を中心とした 週間 秋期彼岸会

動きやすい、気候に合った暖かさの服装で「出席下さい。お観音(輪観音、わけさ」と云います)とお数珠は、「ご持参下さい。お持ちでない場合は、在庫がありますので、お申し出下さい。」

行事以外の毎月定例の集いは、出席の方々の「都合」「希望に合わせて日程を変更する事もあります。

又毎月の集いは、住職の都合で、お休みになる事もあると思いますが、知らなくていらつしゃつても、無駄な時間にならないように、写経や法話DVD鑑賞や、法話CD等が聞けるようにしています。

休憩時間には、茶菓のご用意がありますが、セルフサービスでお願いします。